



Title	＜新資料紹介＞陽明文庫蔵「為兼卿和歌抄」について
Author(s)	田中, 裕
Citation	語文. 1959, 22, p. 47-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68538
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

陽明文庫蔵「為兼卿和歌抄」について

田 中 裕

最近陽明文庫の圖書を閲覧させていたとき、同文庫典籍目録に「為兼卿和歌抄」と記載されてゐる一写本を見て、この歌論書のすでに孤本でないことを知った。以下その大要を紹介する。

これは縦約二九糎、横二二糎ほどの袋綴の冊子で、色変りの料紙を用ひて二五丁、右上の端を簡単に紙縫で結んであるが、料紙を検するとそれは源氏物語松風巻の全文を書写した冊子——表紙二丁、本文二三丁——をそのまゝ裏返して紙背を用ひたものであることが分る。表紙の左肩に前記表題を記し、内題はなくて直ちに本文がはじまり十五丁に互る。あと八丁は余白のまゝ残り裏表紙に続いてゐる。奥書はない。本文は一面十行書き。かうした外形にふさはしい

速筆であるが筆蹟は見事で、時代は室町中期を下るまいと思ふ。従つて図書寮本より古写であるが、本文を比較すると漢字、平・片仮名の字配もほぼ合致し、特殊な字形にまで相似が目につく。また和歌をすべて二行に書くについて文字の分け方や、「本」「虫損」と傍注されてゐる場合も一致する。両本が極めて親近な関係に立つことは明らかで、それだけに本書によって図書寮本に多い難読の個所の解決されるものは少いといふことになる。次に管見に入つた両本の異同のすべてを掲出する。それについて図書寮本の本文は、翻字として最も忠実な複製本附録の「釈文」を用ひ、必要に応じて複製本文を参照する。所掲の頁・行数や字句は即ち「釈文」のそれである

が、異同ある部分には傍線を附し、下に陽明文庫本のその個所を対照する。因みに本書はかなり蝕まれてゐるが、文字の損傷はその割にひどくない。

- 一 (七頁三行) ロにたのしみ候——陽明文庫本「ひ」。
- 二 (八頁一行) 乃至草木を——右傍に「ナイシ」と訓を附す。
- 三 (八頁二行) 樸楊大師も見せられ——「尺」。あとまでして圖書寮本と同形の「見」の草体に訂した風にもみえるが、なほ明らかに「尺」の字形を残す。
- 四 (八頁三行) 治世みちともなり——「浪」の草体風で「治」とはよめない。
- 五 (八頁九行) 婆羅門僧正を迎給時も——右傍に「ヘタマフ」と訓を附す。
- 六 (九頁一五行) たしなむとや聞えさり——「也」。「之」に似た、例の異体字で、このまゝ「や」とはよめまい。
- 七 (九頁一六行) 送る人の返事——「返し」。「し」を濁つてよむなら、単なる字配の差異にすぎない。
- 八 (一〇頁四行) 心にいひそめたうなと——「そ」。圖書寮本の「う」は「そ」と紛らはしい、例の字形であるが、こゝではやはり「う」とよめる。
陽明文庫本は「楚」の草体で明らかに「そ」である。
- 九 (一〇頁一七行) をよはぬをはつる事——「へ」。
- 一〇 (一一頁一七行) 藝晴もなく——右傍に「ケハレ」の訓を附す。「藝」の字形は圖書寮本とはぼ等し

く、やはり「藝」とはよみ難い。傍訓は本文と同筆か。

- 一一 (一八頁六行) されは戀の歌をは——圖書寮本の複製を見ると片仮名をあてゝあるが、陽明文庫本も同じ。
- 一二 (一八頁一〇行) 虫損——圖書寮本では「虫損」と傍注して、その本文の部分を円く囲つてあるが、陽明文庫本は一字分を空白にしてある。

以上の異同を見ると、三・八は陽明文庫本の方がよく意味が通じ四・六・九は圖書寮本の方がよく分る。その中とくに四・六・八などを勘合すると、両本の関係は直接の転写ではなくて間接と考へる方がよささうに思ふが、しかし前述のやうに書写状態は甚だ似てゐるのでなほ詳しくは考へたい。前掲三個所の傍訓はおそらく親本にはなかつたであらう。

本書の紹介を許容された上、種々御示教くださった陽明文庫主事小笹喜三氏に末端ながら厚く御礼申上げたい。

—— 大阪大学助教授 ——